



## 第54回日本肝臓学会総会

榎本 平之

兵庫医科大学内科学肝・胆・膵科准教授

### はじめに

およそ3年前になりますが、熊本大学の佐々木裕教授が開催された第51回日本肝臓学会総会のMeeting Reportを書かせていただきました。そのときは今回の学会開催が決まって間もない時期であり、拙文の最後に「ちなみに3年後の2018年には、当科西口修平教授による第54回日本肝臓学会総会が予定されています。医局員一同全力を尽くす所存ですので、皆様からの熱い御支援を賜りますようお願い申し上げます」と記載しました。

その後の準備期間を経て、第54回日本肝臓学会総会が2018年6月14日～15日に開催されました。従いまして前回は一般参加者の立場でしたが、今回は主に開催医局の事務局の立場での参加となりました。

本稿については、事務局としての仕事が既に決定している状況で執筆のお話をいただきましたが、果たしてThe Liver Cancer Journalという雑誌にふさわしい内容のレポートが書けるのかという不安がありました。しかしながら準備や当日の様子について、開催事務局側からのレポートもあまりないだろうということで引き受けました。本稿の内容が雑誌の趣旨と合致するかと問われると困るのですが、たまにはこういうレポートが紛れこむのも一興とご容赦いただければ幸いです。

### 学会のコンセプト

肝臓学会の会告とも重なる内容ですが、今回のメインテーマは「肝臓学の変革に挑む—新天地への船出—」となりました。特に西口教授が長年研究や臨床のターゲットとしてきたC型肝炎は、経口抗ウイルス薬によりほぼ

根治できる時代となるように大きな変革期を迎えています。今回の学会には「これからの新しい潮流を的確にとらえ、新知見の創生の中とする」ことを目標に、会長自らの発想でさまざまな工夫や試みがなされました。

まずはより多くの学会員の方々にご参加いただく場となるよう、基礎医学・外科・放射線科・小児科領域のテーマを幅広く主題演題として取り上げました。加えて研究の国際比較の場を設け、日本の独自性を確認することも重点が置かれました。そのためEASL Joint Meetingでの国際交流とともに、今回は肝癌・B型肝炎・C型肝炎・肝線維化の4つに関して海外の第一人者の方々から研究動向をご講演いただき、その後同じテーマで主題セッションを行うという構成が組まれました。開会式直後の肝癌のシンポジウムでは、Barcelonaから来日いただいたBruix教授のご講演でスタートという貴重なセッションになりました(写真1)。

また主題示説として「肝硬変の成因別実態」が企画されました。これは西口会長の恩師である大阪市立大学の山本祐夫先生が1983年に初めてわが国の肝硬変や肝癌の成因調査を取り上げられ、その後35年の間に定期的に集計されてきているものです。ウイルス型肝炎が主体であったわが国における、肝疾患の成因の移り変わりや現状の把握を目指して企画されました(ここのセッションについては僭越ながら司会を担当しましたので、後に記載します)。

さらに今後の方向性を明らかにするために、まず4名の理事の方々にご講演いただく「肝臓研究の過去から未来への潮流」の特別セッション、さらに肝臓と糖尿病・代謝研究会を共催している日本糖尿病学会の門脇孝理事長に「糖尿病学会から肝臓学会への提言」のご講演、そ